

受念寺だより

真宗大谷派 岸上山 受念寺

大阪市住吉区万代 5-17-25

電話 06-6674-1135

ホームページ junenji.publog.jp



見回せど われが作りしものはなし

みなひとさまの お手の賜物

作者不明

琵琶湖畔を車で走っていて、たまたま通りかかったお寺の掲示板でこのことばに出会いました。

「衆生や愍れむべし、互いに相い呑食す」お釈迦さまの少年時代、鳥が虫をついばむのを見て、こう言いました。私たちは、自分の生命を維持するために、他の生命を栄養として摂取しています。自然の中に生きるすべての生き物はそうやっていのちをいただいで生きています。にもかかわらず、私たち人間は、自分のいのちを「これは私のものである」と思い生きています。

努力して家計を維持する、努力して名誉ある地位につく……。その努力も、他の生命のいのちと、他の人々の様々な営みの上にのみ成り立つことです。自分の努力の裏で、どこかで誰かが大きな犠牲を払っている。悲しみを抱いている。にもかかわらず、そんなことは思いもせず、努力して得たものほど、「私のものである。」と思い、また「他人にわたしてなるものか。」としがみついています。

ほんとうは自然の中に生き、他人との間に生きる私たちは、自分の中に常に他者が生きています。しかし、「私なもの」にしがみつきたい私たちは、敢えて開かれた世界から自らを閉ざし、他者を排しています。自ら孤独になろうとしているようです。そして、その「私なもの」は老病死によって脆くも崩れ去り、孤独の中に放り出されるのです。

私が今ここで悲しんでいることが、誰かを生かしている。誰かの悲しみが今私を生かしている。もともと孤独ではなかった、それはとても生きていく上で力強いことなのに、そのことをなぜか私たちは忘れよう、忘れようとするようです。

(写真撮影…正仁。「朝日と少年」インド・ケッサリアにて)

泣いている理由

「患者さんが泣いています。一度診てください。」担当の患者さんではなかったし、精神的なことであれば精神科の領域だ。私の専門分野は神経内科である。神経内科はよく精神科と混同される。こころの病は精神科や心療内科が担当で、神経内科は脳卒中やパーキンソン病などの脳や脊髄、筋肉の病気を診る科である。

看護師が言うには、その患者さんは脳卒中の既往があり、認知症もあり意思疎通が全くとれない。そしてちょっと泣くのではなく、少し話しかけるだけでかなりの長い時間泣きつづけるため、今回の症状は脳卒中の症状である「感情失禁」ではないか、というのである。

感情失禁 emotional incontinent とは、外界の些細な刺激で泣いたり笑ったりするというように、抑制がきかず感情が不安定な状態をいう。両側脳幹上部（核上性皮質脊髄路）の障害を持っていることが多いといわれる。

一応神経内科の領域の可能性もあろうと、診察することとなった。診察に行く前、別の看護師は、「わたしにはわかる。あれは寂しいだけや」と言った。

病室に行くと、確かにずっと泣いておられる。お話を聞こうとするが、何を言っておられるのか全く聞き取れない。何かを訴えられるようではあるが判別できない。しかし、注意深く質問をしたりお話のしかたを聞いたりしていると、どうもこちらの言うことは比較的理理解されておられるようである。したがって非流暢性失語 nonfluent aphasia（運動性失語 motor aphasia ともいう。理解は可能だが発語ができなくなる）ということがわかってきた。これも脳卒中の一つの症状である。

言いたいことはたくさんあるが、言葉にできない。そして皆「あの人は認知症だから」と決めつけ聞くとうとしない。誰にもわかってもらえないという孤独感。そういうことではないか。

そこで、字で書いていただくことにした。通常、非流暢性失語であれば書字もできなくなるが、純粹運動性失語 pure motor aphasia（皮質下性）であれば書字能力は残っているかもしれない。しかし、残念ながら字のほうも何を書いていくか判別できなかった。長い時間かけてみたが、やはりわからなかった。

すると、ちょうどそこに理学療法士の実習中の学生さんが来られた。こういう体勢にすれば書けることとがありますよ、と教えてくれた。そこでそうしてみると、なんととはっきり字が書けたのである。そしてこのように書かれた。

「今一人 みないない」

あの人は認知症である、と決めつける。また、脳卒中の感情失禁である、非流暢性失語である、と「診断」する。つまり、理解の程度に違いこそあるが、いずれの場合も「わかった」つもりになっているのである。そして一旦「わかって」しまうと、それ以上の上のことは見えなくなる。この人は認知症の人だ、感情失禁の人だ、失語症の人だ、という目でしか見られなくなる。その「人」を見ているのではなく、自分の「わかった」が作りだした「影像」を見ているだけなのである。「寂しいだけだ」といった看護師も、当たっているようで同じ問題がある。結局あの人は「寂しい人だ」というレッテルを貼ったに過ぎない。同じことである。「寂しい」のひとつでは言い尽くせない孤独感をずっと一人で抱えておられたのである。

いつも行く聞法会で、ちょうどそのような話があった。「わかった」はものごとを見えなくする。「わ

からない」というのは問題を放棄しているようだが、そうではない。たとえ話がわかりやすかった。本の校正作業で、一回、二回は間違いに気がつくが、三回目になると間違いがわからない。目の前の本を読んでいるようで、実は自分の中にできあがった本を見ているに過ぎない、目の前の本をほんとうには見えない。なるほど。

「わかった」を破って初めて新しいことがわかる。追求すればわかるはずだ、という傲慢さを人間はどこかで持っている。自分の智慧の限界を知らされて、深いところから出てくる「わからない」は問題の放棄ではない。むしろ目の前のものごとにはちゃんと向き合った結果であり、自分の思惟の能力を超えた事態を認める誠実さがある。自分の知らない世界や、自分が気づいていない自己自身の大きさや深さに対する敬いと感動がある。

その後、不思議なことにその方が泣くのはピタリと止まった。しかしそれで一件落着ではない。むしろ「わかった」で終わる問題にしてはいけない。あの方が残された言葉の意味は何だったのか。人間が生きていく上で、孤独ということとは大きな問題である。自分はいったい孤独とどう向き合うだろうか。同じ問題を抱える一人の人間として一緒にになって問題に当たらなければならぬ。

「わかった」は力を失う。「わからない」が力になる。そのようにも聞いたことがある。

（ブログ「お医者さんはお坊さん」junenji.blog.jp 二〇一四年六月二十三日の記事を改編）

インド旅行記 混沌と躍動のインド

三月初め、少しインドに行ってきた。テーマは「仏陀の旅路」。『大般涅槃經』（マハーパリニッバーナ經）に、仏陀釈尊が般涅槃される（亡くなる）までの旅路が記されており、その道程を中心に仏跡を巡る旅であった。旅を通して見たインドの姿を言葉で伝えるのは難しい。数々の美しい風景も、心豊かな人々との出会いも言葉にすると色褪せてしまう。しかしあえてひとことと言ふならば、「躍動感」だろうか。かざらない人間味とでもいおうか。

釈尊が最後の食事をとったといわれるパーヴァー村を出て、般涅槃の地クシナガラを一旦通り過ぎ、ネパール側に向かう途中のことであった。沙羅の木の側で休憩をとろうとした。すると、どこからともなくわらわらと猿たちが現れた。それに驚いていると、今度はどこからともなくパチンコ少年が現れ、追い払う。追い払ってくれたのか、遊んでいるのか、それもわからない。そんな具合である。

ネパールとの国境付近で物乞いをする子供たちは、本当の苦勞を知らない私が簡単に言えることではないだろうが、何かそこに悲壮感はなく、「Give me money」といつていたかと思えば、その後警官に追い回されても、それを遊んでいるかのようなのである。この子に限らず田舎の町で感じたのは、私の感覚であれば貧困や理不尽さに行き詰まったり憤ったりするのでないかという状況の中で、それら遊び蹴散らしてしまう力があるように感じた。



あの「祇園精舎」のあるシュラヴァステイ（舎衛城）の名で知られる）の町に入ったときである。車で走っていて、ずっと通り過ぎた瞬間に見た光景が忘れられない。一瞬だったので写真には収められなかったが、今でもありありと目に浮かぶ。一人の少年が夕日に向かって手を合わせていたのである。言われてしているわけでもなく、何か自分の個人的な願いをお願いするのでもなく、ただ自然に手を合わせ、自然に頭が下がっているように見えた。自分の思いの至らない大きなはたらきに。

その姿が訴えかけてきたものは、日頃の感謝を大切にしましょう、というような生半可なものではない。私の奥深くまで蔓延っている、自分の思いが中心で、存在そのものを尊べず、存在を成り立たせるはたらきに決して手を合わせようと思わないような生き方。自分の思いに自ら振り回され、自分をかざり、自己自身に背いている。そんなとても変えることのできない根深い自分のありようが浮き彫りにされるようだった。

さて、冒頭で人間味といったが、決してきれいなことばかりではない。きたないこともまた人間味である。問題はたくさんある。ラクナウの都市では、大きな商業施設が立ちならぶ一方で、一歩外に出ると物乞いの子供たちがいるという極端な格差社会。アヨーディヤで感じたヒンドゥー教とイスラームの対立からくると思われる妙な緊張感。カーストを背景とする根深い差別問題。うわべだけを見て根っこを見なければ、見たことにはならないだろう。決してインド固有の問題として片付けることはできない。他人事ではない問題がそこにはある。

玄奘に倣って今回のインド旅行記でも書こうかというすらすら計画である。しかしだいたい計画通りに行っていることがない。期待せずにお待ちいただけたいと思う。

受念寺の歴史（第二回）

池田町時代（安土桃山時代）

一五九三年（文禄二年）～一六一五年（元和元年）

石山合戦と天満移転

信長が台頭する時代です。一五七〇年（元亀元年）～一五八〇年（天正八年）には石山合戦があり、その後の東西本願寺分派に繋がりました。当受念寺の記録には、一五九三年（文禄二年）東西本願寺に分派し、第三世圓西（一五七二）（註①）は東派に帰したため（註②）、吹田・濱道村（濱ノ堂）から大坂天満の池田町（現在の大阪府北区天神橋四丁目辺り）に道場を移した、とされています。

東西本願寺分派について

しかし、正確には一五九三年にはまだ東本願寺は成立していません。

一五九二年（天正二十年）に顕如上人没後、十一月教如上人が継職しました。しかし石山合戦以来の教団内の対立、そこに顕如上人讓状の偽文書や豊臣政権内の対立などが影響し、一五九三年（文禄二年）閏九月、一旦は教如上人の継職を認めていた豊臣秀吉が、ここにきて教如上人に退隱を命じ、顕如上人の子・准如上人が継職しました。

その後も教如上人は独自の活動をつづけ、一六〇二年（慶長七年）、徳川家康が教如上人に寺地を寄進、一六〇四年（慶長九年）両堂が建立されました。これをもって現在の東本願寺の成立とされています。

したがって、一五九三年の教如上人退隱が当寺移転のきっかけとなったと考えられます。しかし当時の住職がどのように教如上人と関わり、なぜ教如上人側についたのかなど、詳しい理由はわかりません。

【第三回 折屋町時代（江戸時代初期）大坂冬の陣・夏の陣の時代です。】

（註は次のページに記載しています。）



お寺は何をすることでいいですか？ (1)

お寺とは何をするといいですか？という質問には、いろいろな答えがあると思います。時によってその姿を変えるのが、またお寺のいいところ。

でもその質問について考える前に、すこし思いを馳せないといけないことがあります。それは、お寺はどのような願いによって生まれ、そして今日までここにあるのか、ということなのです。

誰もが気楽に楽しく人生を送りたい。やりたいことをやって充実した人生を送りたい。喜びのある人生を送りたい。そして大切な人にもそうあってほしい。そのように思います。しかし現実はどういうまういきません。あるときああしていけば。あるときあれをしなければ。あの人さえいてくれてたら。あの人さえいなければ。病気さえかからなければ。あれさえあれば。あれさえなければ。現実はいかに思いたいとおりにいかないことばかりです。目の前の生活のためにはしたくないこともせざるを得ない、したいしなくないなどと言っていられない、ということもまた現実です。また、いくら明るく楽しく過ごしたいと思っても、大切な人との別れは突然やってきます。病い、老い、そして死は、私たちが楽しく過ごしたい、充実した人生を送りたいという思いを奪います。嫌なこと、悲しいこと、つらく苦しいことはできればなかったことにしたい。避けて通りたい。向き合いたくない。しかし人に「痛み」「悲しみ」がある以上、人間である以上向き合えないわけにいかないのです。

老病死を代表とするような、自分の思い通りにならない避けられない出来事。これは自分から何を奪うのか。それは人生の支えを奪い、生き甲斐を奪い、喜びを奪います。生まれてきたことを喜ばなくなるのです。思いどおりにならないことがひっきりなしに起こり、その度にその出来事に振り回され、自分

に振り回されるような、暴れる川の流れるような人生。しかし、そうだけれども、その中をどこか安心できる道筋を渡りたい。堂々としっかりと歩みで渡りたい。空しく流されたくない。そして人間として生まれて良かったといいたい。また、大切な人、例えば生まれてきた子供たちにも同じように、大変な人生だけれど、しっかりと生き生きと歩んでほしい。人生を空しく過ごしてほしくない。人間として生まれてきて良かったといえる人生を歩んでほしい。そのように願うのではないのでしょうか。

仏教の歴史の中で願われてきたことは、まさにそのことです。つまり、いろんなことが起ころうとも、それを安心して楽しみ、また安心して苦しめるような人生の確かな立脚地を、自分のために、そして大切な人のために求めてきたと言えるのではないのでしょうか。お寺はそのような願いのもとに生まれ、そのような願いがあったからこそ今日までつづいてきたといえるでしょう。そしてその願いから生まれた大切な智慧である仏の教えを伝えてきたのです。

それでは、お寺は具体的に何をすることでいいのでしょうか？次回から3回にわたり、それを見ていくことにしたいと思います。

「受念寺の歴史」の註

(註①) 圓西は一五七一年十月二十八日寂と記録されています。石山合戦は一五七〇年に始まり、顕如上人が大坂を退去したのは一五八一年三月です。顕如上人の大坂退去後も教如上人は残り、これは東西本願寺分派の遠因となりますが、それでも一五八一年三月であり、圓西の亡くなった一五七一年の時点では東西分派の気配はまだありません。したがって、第四世圓正(一六〇三年)の誤りではないかと考えられます。

(註②) 調べたところによると、実際吹田市の濱ノ堂があったあたりは、現在でも本願寺派(西本願寺)の寺院が多いようです。

編集後記

インドまでは十一時間半と少し遠いですが、他の国では中々感じることでないことがたくさんある所です。大変なこともあります。是非おすすめていただきます。

さて、昨年の第二号に続き、第三号を発行することができました。一応、今のところ当初の計画通りのペースで発行させていただいております。現在は私一人で執筆、編集ともに行っておりますが、いずれは、いろいろな方に書いていただいたものをお届けできたらと思っております。

バックナンバーをご希望の方は、直接受念寺事務所でお申し出いただくか、gene.kishi@gmail.com に住所・氏名をメール頂けたらお送りいたします。また、受念寺ホームページ juenji.blog.jp でもご覧いただけます。

(文責・副住職 正仁)

*副住職ブログ「お医者さんはお坊さん」
juenji.blog.jp もご覧ください。

軽費老人ホーム 受念館

入居者募集中！

- ★「住みよい居室」「おいしい食事」を「軽費で」ご提供。
- ★心のふれあいを大切にする、昔ながらのアットホームであたたかな安心の生活環境。
- ★60歳以上で食事が自分で取れる方なら、どちらにお住まいでも結構です。

施設見学は午前10時から午後5時まで。いつでも受け付けております。

◇お問い合わせは・・・
06-6674-1181 までお気軽にどうぞ。
ブログ：<http://52664141.at.webry.info/>